

2018 国連ニューヨーク本部 SDGs 推進会議 牧野鯖江市長スピーチ全文

2018.5.31 国連ニューヨーク本部 会議棟地下1階会議室 6

皆さんこんにちは。日本の「めがねのまちさばえ」からまいりました鯖江市長の牧野百男です。

今回のテーマ「SDGs 達成を目指して」「ジェンダー平等と女性力推進」に合わせて、デモメガネを作ってきました。SDGs 17の目標を左右各8目標ずつに分け、目標5の「ジェンダー平等実現」で左右をつなぐブリッジとして使いました。一つのレンズで世界の動きを捉え、そしてもう一つのレンズで地域を考え行動する、「Think Global Act Local」がコンセプトで、ブランドはメイドインサバエ「グローバル」です。「グローバル」をかけてスピーチさせていただきまことをお許し願います。

まずは、この国連本部においてスピーチをさせていただく貴重な機会を与えていただきましたアンワルル K. チャウドリー国連大使をはじめ、国連関係機関の皆様にご心からお礼を申し上げます。

鯖江市は人口7万人弱の地方都市でありながら、世界で初めて、眼鏡枠への応用は無理といわれたチタン素材を使用して、世界で初めて量産化に成功したまちです。また、パリコレ素材から航空宇宙産業資材まで幅広い用途に対応する繊維産業や、さらには1500年以上の歴史を有する漆器産業を主とする家内工業が集積する社長の多い「ものづくりのまち」です。まちの中心には「日本の歴史公園100選」の一つで、桜やつつじ、もみじなど年間を通して市民が集い楽しめる西山公園があり、その周辺には田園が広がる自然豊かな美しいまちです。

そんなどこにでもある小さな地方都市の鯖江市が何故、SDGsを推進しようとするのか、その一端をご紹介します。

日本では東京を中心とする首都圏に人口が集中し、地方都市の半分が人口減少で将来消滅するというショッキングなレポートが出されました。また、東京でオリンピックが開催される2年後の2020年には日本人女性の半分以上が50歳以上となり、2024年には国民の3人に1人が65歳以上になるとも見込まれています。日本は世界のどこの国も経験したことのない「長寿大国」の道を走りだしており、少子高齢化がもたらす社会保障費の増大と地域経済の縮小は、持続可能な都市経営を目指す地方都市にとって喫緊の課題となっています。

鯖江市は1955年の市制施行以来人口が増え続けています。その要因は、地域経済の

発展を支える地場産業と、まちの魅力を高める市民の力にあると考えており、その両面において女性が大きな役割を果たしています。

雪国で生きるために農閑期の副業として始まった地場産業の歴史は、眼鏡産業のチタン加工をはじめとする技術を囲い込まない地域内オープンイノベーションによる技術革新と工夫の積み重ねです。互助の精神を背景に、鯖江のまち全体が一つの完成品を生み出す工場に例えられることもあります。市内企業の多くが専門化された分業体制の中で、イタリアの創造都市ボローニャのように、切磋琢磨しながら内発的にイノベーションとインキュベーションを繰り返すことで成長を遂げ、今の伝統を築き上げてきました。最近では眼鏡の加工技術を活用した医療機器やスマートグラスなど、成長分野に進出する企業も増えてきました。また、漆器の木工技術を生かし、雑貨や文房具などのブランディングに成功し、新市場を切り開いている企業も現れています。

新しいことに挑戦できる地域風土とものづくりにあこがれて、最近では鯖江に移り住む若者が増えており、特に若い女性が眼鏡デザイナーや漆器職人になりたいと鯖江に集まり始めました。若い女性の柔らかな感性が新しいものづくりに生かされ、産地全体のイメージが変わりつつあります。

鯖江市のある福井県は、幸福度ランキングで3年連続全国1位です。因みに東京都は4年連続全国2位です。そして、女性の就業率や労働力率、共働き率は全国1位で、20代から40代前半にかけての女性の就業率は先進国であるスウェーデンを上回っています。三世代同居率も全国2位で、鯖江市の各指標においても全国平均を大きく上回っています。市の独自集計によれば、市内全事業所のうち約6割が従業員4人以下の家内工業で占められており、家族経営の中で女性の果たす役割は重要です。女性は仕事と家庭や子育てなどのバランスをとり、家族一人ひとりがその役割を確立しています。国の家計調査によれば、福井県の世帯所得は高く、年によっては東京を上回ることもあります。多世代が暮らせる大きな家に住み、地域固有の文化を次の世代に継承しながら、子どもたちの教育にも力を注ぎ、福井県の小中学生の学力・体力は全国総合1位を獲得しています。最近では市内の空き家を活用して都市部の企業がサテライトオフィスを開設する動きも加速しており、子育て中のママさんが限られた時間の中でも仕事ができる新しい働き方を提案する企業も誕生しました。

幸福度が高く、女性が働きやすいまちといわれ、男女がともに産業を支え、女性が輝くまち、そんな豊かな環境にある鯖江市においても、若者の県外への人口流出は続いており、少子高齢化の流れの中で近い将来、人口減少時代が来ると推計されています。今後、鯖江市が50年、100年と将来にわたり成長力を確保し、持続可能なまちづくりを進めるには、女性も若者も高齢者も、そして障がい者も誰一人置き去りにすることなく、市民一人ひとりが主役となっていきいきと生活できる社会の実現を目指すことが必要

であり、SDGs の理念に沿った市政運営が求められています。鯖江市から女性が幸せを感じる、女性が輝くものづくりのまちのロールモデルの構築を目指します。

その具体的な取組みをご紹介します。鯖江市では 2010 年に市民からの提案をもとに「鯖江市民主役条例」を制定し、市民が積極的に市政に参加する市民主役のまちづくりを推進しています。特に、女子高校生が自分たちのふるさとに関心を示し、若い感性で楽しみながら地域と関わろうとする「鯖江市役所 JK 課」の取組みは全国から大きな注目を集めています。最初は 2 つの高校 13 人でスタートした JK 課は、現在では 6 つの高校から 42 人の女子高校生が集まり、眼鏡業界や大手コンビニエンスストアとコラボした商品開発や日本最高学府である東京大学での講義など、女子高校生ならではの視点を取り入れたシティプロモーション活動を展開しています。地方の若者の多くが大学進学や就職を機会にふるさとを離れる中、これまでに JK 課を卒業した 1 期生と 2 期生 19 人のうち、18 人が地元に残り、そのうち 13 人が継続してまちづくりに参加しています。地域の担い手としての意識醸成につながるこの取組みは、他の地域でも始まっていますが、自由な発想でまちづくりを楽しむ彼女たちの活動に触発されて地域の大人たちも少しずつ変わりはじめました。「OC 課」おぼちゃん課といわれる中年層の女性が「私たちにも何かできる」、「女性の視点のまちづくりを進めたい」と自ら立ち上がりました。これまでの大人の価値観と常識の殻を破ることで、新たな挑戦が生まれています。未来に夢と希望が広がる持続可能な鯖江を創造するため、「若者が動けば大人が変わる。大人が変われば地域も動く」という意気込みで、若者や女性など幅広い世代の居場所づくりと出番の創出に取り組んでいます。

鯖江の女性の活躍はこれらの地域風土に育まれてきたものです。特に一世紀もの長い間、女性が経営者を支え続けてきた鯖江の眼鏡産業は、今や世界が認める高品質フレームやレンズを生み出す産地に成長しました。市内には最新モデルが一堂に揃う産直ショップや眼鏡づくりの歴史を学べるミュージアムがあり、街なかにはめがね型ベンチやモニュメントが溢れています。そして、全ての子どもたちの目の健康をチェックする 3 歳児での検診も実施します。また、全中学校への目の運動能力を鍛えるビジョントレーニングマシンの設置や公立病院に最新の検眼機器導入も計画し、ビジョンケアの充実を図ることで、世界的な「めがねの聖地」として、鯖江のまちが飛躍できることを目指しています。

皆さん、女性がまちづくりの主役となって、すべての市民がいきいきと生活している鯖江市民とふれあいに来てください。そして一生物の幸せのめがねを鯖江で作ってください。「めがねのまちさばえ」は皆さんとお会いできることを心から楽しみにしています。ありがとうございました。